

はじめに

「選択除草」は、草地を観察しながら除草する、除草対象を限定する、在来種を生かしながら育てる、といった特徴により、長期的には作業負担を軽減し、植物の知識や参加者同士の関係、場所への愛着が深まる効果も期待できる植栽管理手法である。しかし、参加者自身が選択除草の意義を感じ得るには継続的な実践が必要であり、未経験者の参加や初心者の継続的な参加をいかに動機づけるかという点において工夫の余地がある。

そこで本研究では、選択除草への継続参加を動機づける工夫の試行とその効果検証を行い、共用緑地空間の利用管理手法として選択除草を導入するうえでの実践的知見を得る。

背景

人口減少、少子高齢化の進むわが国においては、財源的・人力的に厳しい状況を背景として、緑地空間の維持管理が手薄になっていくことが予想される。特に日常生活領域においては、手入れが行き届かず繁茂した草地をなるべく減らし、住環境として好ましい状態をいかに保持するかが切実な課題となってくる。

ところで園芸や庭づくりなどの緑地との関わりは、人にリラクセス効果やレクリエーション効果をもたらすことが知られている。また、そうした営みに共同で取り組むことで、参加者らのコミュニティの形成も期待できることが明らかになっている。

以上より、より多くの市民が各自の主体的な実践の場としての「庭」を持つこと、すなわち、身近な緑地空間に対して、余暇活動や健康づくりを兼ねて楽しみながら維持管理に参加できる仕組みや仕掛け（これらは「グリーンインフラ」としてとらえることができる）が広く普及・展開することが、冒頭で掲げた課題への1つの対策となる。そして、そのような緑地の維持管理に有用な手法として本研究で注目するのが「選択除草」である。

「選択除草」紹介
YouTubeショート動画
(研究室学生制作)

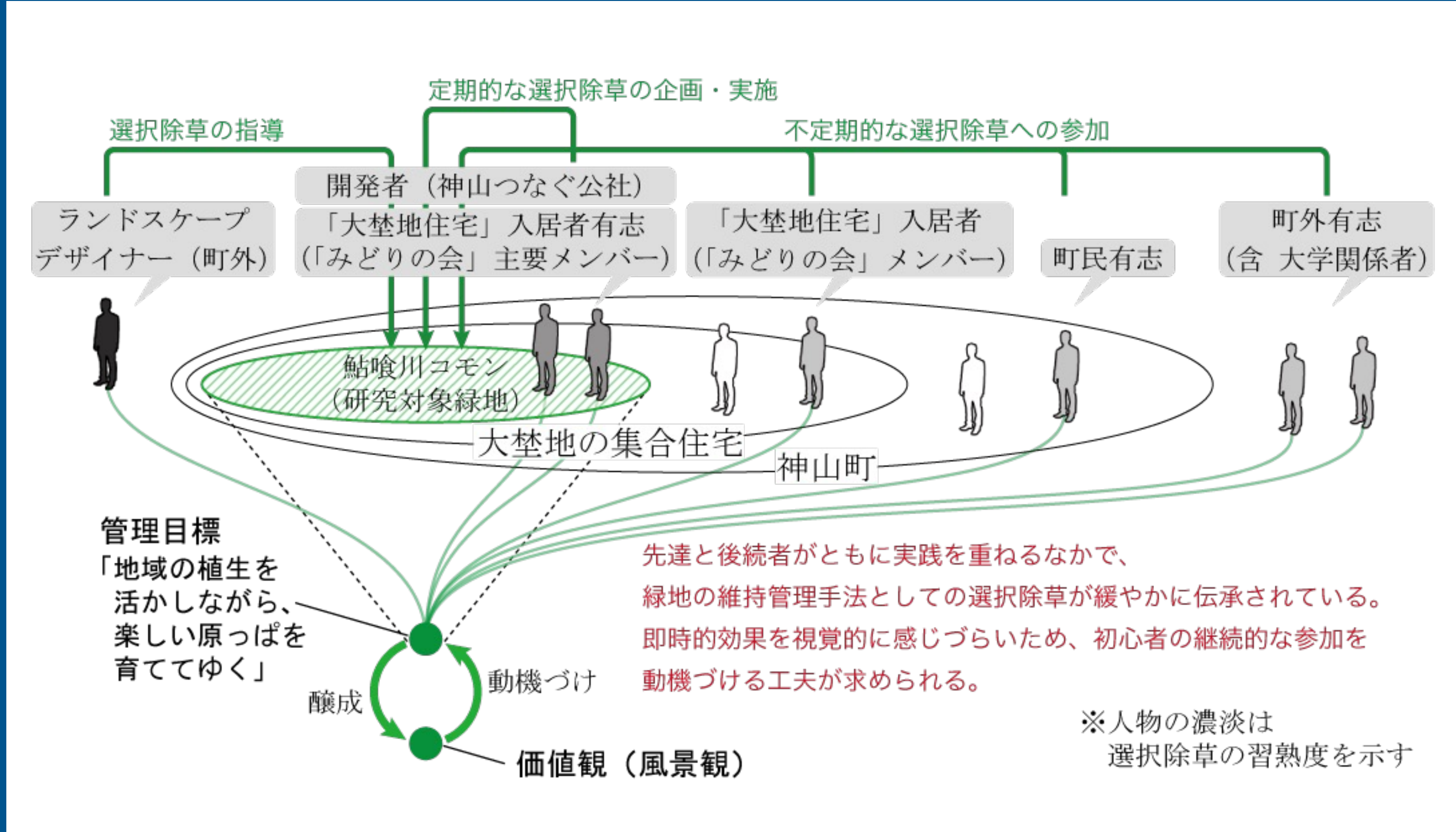


研究対象の概説

「大埜地の集合住宅」は、徳島県名西郡神山町にある子育て世代向けの町営集合住宅である。人が住みたいと思える「可能性が感じられるまち」を目指した「まちを将来世代につなぐプロジェクト」（2015年神山町策定の創生戦略）の一環で整備された。「住む人だけでなく、まちの人みんなが関われるコモンスペース」も含めて開設されている（住宅棟エリアである「大埜地住宅」と、共用緑地「鮎喰川コモン」で構成される）。集合住宅の設計においては、神山町らしいランドスケープが構想され、地元の高校生らが育てた町産の苗木を含む在来種による植栽がなされたり、「一つひとつを人の手によってつくりあげていくことが徹底されている」点等が評価され、2022年度グッドデザイン賞を受賞している。

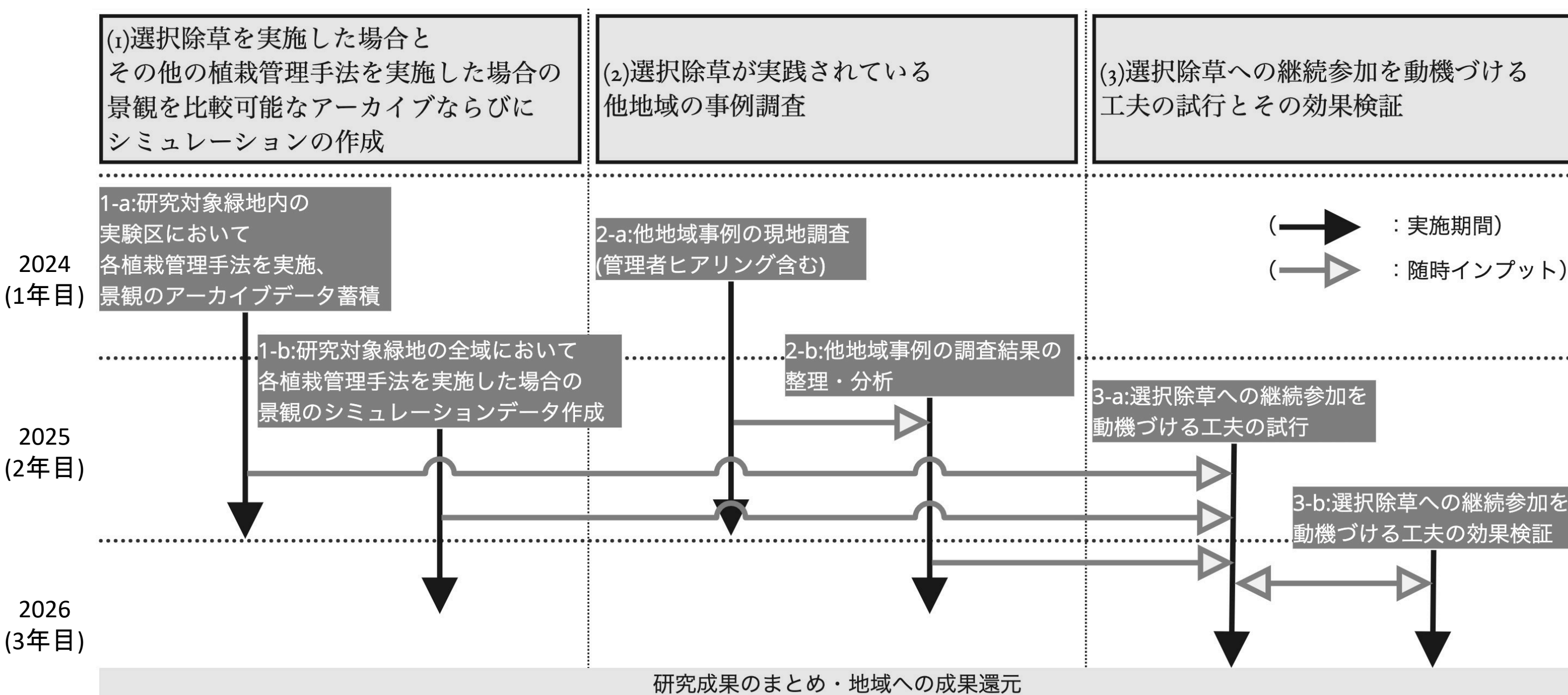
現在、同集合住宅敷地内の共用緑地は、入居者で構成される「みどりの会」が中心となって維持管理している（月に1回1時間程度の活動を基本とする）。この維持管理において、在来種を主とした草地を育成するため、植物の状況を観察し、繁殖力の強い外来種や増え過ぎた在来種を選択しながら除草する手入れとして、主に人力による「選択除草」が行われている。作業への参加のハードルは低く（ただし都度の作業方針の決定には一定の経験が必要である）、複数人で何気ない会話をしながら取り組むことができる。これにより、植物に対する知識や住民同士の関係が深まるだけでなく、集合住宅が愛着を持って長く住み継がれていくことが期待されている。集合住宅のランドスケープデザインを担当した田瀬理夫氏が住宅完成後も年に2回程度招聘されており、選択除草に関心のある入居者を始め、町内外から人が集まり、実演指導を受けている。

研究対象緑地の維持管理にかかわる主体の全体像



何をどのように、どこまで明らかにしようとするのか

本研究は3カ年で取り組む計画である。研究の流れを図に示す。目的(1)と目的(2)に対応した研究成果は、目的(3)の細項目「3-a：選択除草への継続参加を動機づける工夫の試行」へインプットし（具体的には、目的(1)で得たアーカイブやシミュレーション結果の選択除草未経験者・参加者への提示と印象評価、選択除草の作業前・作業中・作業後の各場面における工夫の試行など）、参加意欲の推移にもたらす効果を検証する。



これまでに得られた結果

目的(1)に対応し、緑地の維持管理作業で得られたデータをもとに、選択除草未経験者・初心者者を被験者とする景観評価アンケートを実施し、選択除草による緑地景観の変化の特徴について検証した。（2025.06 土木学会四国支部技術研究発表会にて発表済）また目的(2)に対応し、他地域の3事例について、ヒアリング・現地踏査を実施した。これらの事例は、緑地の空間的スケール、維持管理・利用の方針、作業人員の規模などに差異があることから、事例ごとの状況を加味しながらより詳細な情報収集が求められる。（2025.03 日本建築学会四国支部研究発表会にて発表済）

上述の調査をもとにした分析から、第三の目的に対応した「選択除草への継続参加を動機づける工夫」の試行内容について検討を進めている。



👉 選択除草が利用管理に取り入れられている国内の緑地事例。選択除草の実践は、ランドスケープデザイナーの田瀬理夫氏が設計や維持管理に関わる施設を中心に国内に数例見られる。

画像出典：<https://www.g-mark.org/en/gallery/winners/13791?years=2022>

<https://www.5baimidori.com/news/2023.html>

<https://shimokita-engei.jp/>

※「ほっちのロッジ」画像は森田撮影

考察・展望

選択除草は、作業員以外に除草されたことに気づきづらいような、さりげない景観変化を緑地にもたらす場合があり、これまでの調査でもそのようなケースが複数見受けられた。これは選択除草の特長の1つの表れと言えるが、未経験者への視覚的な訴求力は弱いということでもある。景観変化だけでなく、除草した草の量や作業の質、作業員の感想なども複合的に伝えることが、未経験者への動機づけにおいてはより効果的である可能性が示唆された。

今後は、動画の構成の工夫（いかに視聴者の関心を喚起しうるか）とともに、SNS等での拡散の方法（いかに動画へのアクセスを促しうるか）についても検討したい。オンライン上での普及の試みとあわせて、選択除草初心者が熟練者に教わりながら試行できる機会を社会的に創出していくこと（香川県さぬき市においてそのような取り組みが始動している）も肝要と考えられ、この点についても引き続き検討したい。